Lines composed a few miles above Tintern Abbeyについて

Lines composed a few miles above Tintern Abbey について

中　林　敏　之

この詩にはワーヅワスの自然に対する態度が，彼の過去のそれと比較対照させて表現されているように思う。

五年振りに訪れた Wye 河の岸辺に立って感ずることは，変らぬ自然の美しい姿と，それを眺めて懐しむ詩人自身の心の変化でもあろうか。詩は先ず魅力ある Wye 河風景の描写に始まっている。水音が聞えるような lines,

> These waters, rolling from their mountain-springs
> With a soft inland murmur.

そして岩肌が迫って来るような目からの image,

> . . . these steep and lofty cliffs,
> That on a wild secluded scene impress
> Thoughts of more deep seclusion;

この風景を懐しむ詩人の心情は，この詩の冒頭，過ぎ来し月日をゆっくり数えるような“five”の繰返えし，

> Five years have past; five summer, with the length
> Of five long winter

或は又旧友に会った時のような“again”の頻繁なる使用，

> . . . . . and again I hear
> These waters, ... ——Once again
> Do I behold these steep and lofty cliffs,
>
> The day is come when I again repose
>
> Once again I see
> These hedge-rows, ...

そして幼児が自分の知っているものを一つ一つ指差して歩くように，各々の牧歌的風景に this や these を冠して展開する表現——例えば These waters; these steep and lofty cliffs; this dark sycamore; these orchard-turfs; など——詩人の懐しさはこのような表現の中に充分感じとることができるのである。そして過去に関連する懐しさばかりでなく，木立の間より立上る煙のたゆたいに新たな想像力が働いて「家なき森の漂流者」や「洞穴の隠者」に思いを走らせるのである。いずれも変らぬ自然の懐しい姿である。或はこれらの懐しさはワーヅワス自身の変化によって一層強まったのかも知れない。

過去，少年時代のワーヅワスには，自然は「粗野なる喜び」の対象であった。

> The coarser pleasures of my boish days,
> And their glad animal movements all gone by.

その後，時を経て今より五年前に初めてこの Wye 河を訪れた頃，つまり彼自身の言う "in hours of thoughtless youth" にあった詩人にとっての自然，或はその自然に対する彼の態度が次の lines から幾分察することができる。

> For nature then
> To me was all in all. . . . . .
> . . . . . The sounding cataract
> Haunted me like a passion: the tall rock,
> The mountain, and the deep and gloomy wood,
> Their colours and their forms, were then to me
> An appetite:

自然が a passion であり，an appetite であり，そして "all in all" であったということは，passion や appetite という語からも容易に想像できるように，客観的な態度で自然に対していたのではないということになるのではなかろうか。今の場合，主観とか客観という言葉は不適当かも知れないけれども，山野を駈けめぐる「のろじかの如く」自然の中にあって自然を愛したというのである。その喜びは "aching joy" であり "dizzy rapture" であった。彼自身が "thoughtless" と呼ぶように感覚的な，或は感情的な愛し方であったのであろう。勿論彼は自然を見ている。むしろ肉眼で自然そのものを見ているのである。

彼の抱いた感情と愛情は，

> . . . . . a feeling and a love,

That had no need of a remoter charm,
By thought supplied, nor any interest
Unborrowed from the eye.

ここにも感情的な彼の態度が示されている。彼はそれを thoughtless と呼ぶのである。過去のワーヅワスにとって自然の魅力は何も思考によって高められるものではなく，肉眼から入って来る美しさのみが全てであった。

然し，もうそのような時は過ぎ去ってしまった。

That time is past,
And all its aching joys are now no more,
And all its dizzy raptures.

今再びこの Wye 河の淵に臨んで立つ時，過去のワーヅワス自身の姿を思い出すのも亦当然である。

これらの美しい自然を眺めている時，又思う時，詩人は何かしら喜びを感ずる。それが少年時代の「より粗野な喜び」であろうと，a passion や an appetite であろうと，それは自然の美の力によるのである。自然の美しさは大きな力をもっている。調和は美であろう。自然の調和に接する時の喜びも又自然の力によると云えよう。自然は「調和の力と喜びの深き力」をもっているのである。直接眼前に展開される絶景を視る時ばかりでなく，その場を去って都会の喧騒の中にある時にも，それらの力は強く働くのである。

These beauteous forms,
Though a long absence, have not been to me
As is a landscape to a blind man's eye:
But oft, in lonely rooms, and 'mid the din
Of towns and cities, I have owed to them
In hours of weariness, sensations sweet,
Felt in the blood, and felt along the heart;

そしてその力によって，喜びによって彼に一つの救済がもたらされる。

that blessd mood,
In which the burthen of the mystery,
In which the heavy and the weary weight
Of all this unintelligible world,
Is lightened:

ワーヅワスは幼ない時から自然の中で喜びを味わって来た。然し自然を見ている中に詩人は自然そのものより自然を眺めては常に満足している彼自身の姿に気付いたに違いない。自然の何がこの喜びや慰みを醸し出すのだろうか，と彼は訝ったかも知れない。詩人の目は今迄見て来た自然そのものから，彼自身の上に，彼自身の心の中に注がれるようになったに違いない。自然の表面よりはもっと本源的なもの，この調和と喜びと救済との根源にあるものを見ようとするようになってゆく。

> **While with an eye made quiet by the power**
> **Of harmony, and the deep power of joy,**
> **We see into the life of things.**

事物ではなく「事物の生命」，事物の背後にある「或る存在」を感ずるというのである。

> **And I have felt**
> **A presence that disturbs me with the joy**
> **Of elevated thoughts ;**

事物の生命の洞察，或る存在の感得によって彼は自然より喜びを得るのである。「人性の静かな，悲しい音楽」もその為に荒々しいものとはならない。我々の言葉でいえば神といっても良いような「一つの存在」の感得である。存在というのは何だろうか。それは

> **. . . Something far more deeply interfused,**
> **Whose dwelling is the light of setting suns,**
> **And the round ocean and the living air,**
> **And the blue sky, and in the mind of man;**

ワーヅワスにとって，それは

> **The anchor of my purest thoughts, the nurse,**
> **The guide, the guardian of my heart, and soul**
> **Of all my moral being**

である。このような存在を心に感ずることによってワーヅワスは humanity の悲しみに耐え或は抑えることができるのを知った。自然を通して知ったのである。

存在は「沈みゆく太陽や円ろき海原，躍動する空気，そして青空」の中に住むと等しく人間の心の中に住む。自然を見れば，時には「人性の静かな悲しい音楽を聴く」ともワーヅワスは謳う。この存在の下にあっては人間も亦自然の一部であって，他のものと同じである。自然を通して人間存在の the life を知るのは大きな喜びと慰みであり，力となる。

> In darkness and amid the many shapes
> Of joyless daylight; when the fretful stir
> Unprofitable, and the fever of the world,
> Have hung upon the beatings of my heart——
> How oft, in spirit, have I turned to thee,
> O sylvan Wye! thou wanderer thro' the woods,

そしてワーヅワスは新しく「自然を観る」ことを学んだのである。自然を観る——これが現在 Wye 河に立っている彼の自然に対する態度である。

> For I have learned
> To look on nature, not as in the hour
> Of thoughtless youth;

如何に自然を観るかということではなくて，もっと原初的に自然を観ること，そのことを学んだのである。前にも言った通り，以前の彼も勿論自然を見ていた。僕はむしろ自然そのものを肉眼で見ている，とも言った。けれどもその時には詩人自身が言うように「思考によって与えられるより進んだ魅力」というものを必要とはしなかった。thoughtless youth という所以であろう。そして又「肉眼によっては得られぬ興味」をも求めようとはしなかった。只目によって得た喜びだけに満足であったのだから，或は感情的に，感覚的に自然を見ていたといえるのではないだろうか。それに対し改めて此処に自然を観ることを学んだのであるというのは理性的な意識で自然を観ることを学んだということになるだろう。客観的に，自然とそれを眺める自分を観はじめたのである。ここに一つの turning point を見出すことができる。肉眼で事物を見ることから，心で，思考で事物の生命を知るということになるのである。

> . . . the breath of this corporeal frame
> And even the motion of our human blood
> Almost suspended, we are laid asleep
> In body, and become a living soul:

という比喩的な表現もこのような彼の態度を指すとも考えられる。

このようにして過去の，自然への肉体的，感情的な態度から精神的な，理性的な態度へと進むのである。彼が学んだ「自然を観る」ことはその点で過去とは可成り異ったものとなっている。

然しそうなると，ワーヅワスの自然を観るということは最早自然を見る為に見るのではない，自然そのものを見るのではなくて，自然を通して，自然を媒介として人間の問題を考えるということになりはしないだろうか。自然を観て存在を感ずる，自然の美しい色や姿に「最も純粋な思いの鍾や心の乳母，指導者，保護者，そして存在の魂」を認めるという。それは自然をかつての如くにその儘受け取って眺めるという態度ではなくて，詩人が観てその自然の中に或る意味を見出すことなのである。自然はそれを観る人自身の意味付けによってその人に新しい存在となる。自然は何も変らずに在るのだけれども新しく創造される。自然は「半ば創り出すもの」というワーヅワス自身の言葉が彼の「自然を観る」という言葉をうまく paraphrase しているように僕には思える。

> what they(1) half create
> And what perceive;

それは又

> to recognise
> In nature and the language of the sense,
> The anchor or my purest thoughts, the nurse,

ということにもなる。もう重点は以前よりも自然から離れているといってよい。

此処にも過去の，むしろ自然そのものを見ていた詩人の態度とは違ったものを感ずることになる。

ワーヅワスが言う“to look on nature”ということは結局意識して理性的に眺め，それを媒介として或る存在を感得することなのである。自然を通して人間の問題に，a presence の下にあって他の自然物と同様に一つの thing である人間の問題に思い至っているのである。

そして最後に詩は，共にこの Wye 河を訪れたワーヅワスの愛する妹への呼びかけとなって終っている。然しその呼びかけの中に我々は再び繰返えされる

(1) they=eye, and ear

彼の自然に対する態度とその確固たる信念を見ることができるのである。

妹の内に詩人は彼の過去の姿を見出す

> and in thy voice I catch
> The language of my former heart, and read
> My former pleasures in the shooting lights
> Of thy wild eyes.

其処にはかつて thoughtless だった頃の詩人が感じた "wild ecstasies" が見出される。然し自然を見詰め美と調和を感ずる内にも自然は醗酵して大きな力となる，そのような時がいつか来るだろう。

> When these wild ecstasies shall be matured
> Into a sober pleasure: when thy mind
> Shall be a mansion for all lovely forms,
> Thy memory be as a dwelling-place
> For all sweet sounds and harmones;

時には人間社会の様々な醜さに遭遇することもあるだろう。「悪しざまな言葉，性急な判断，利己的な人々の冷笑，親切心のない表面だけの挨拶（これも耐えられないものの一つであろう），凡ゆる日常生活の荒涼たる交り」けれども「自然は自然を愛したものを決して裏切ったりはしなかった」ことを経験して来た。——この辺りにワーヅワスが自然へ入って来た一つの動機があるようにも思える——自然を見ることによって人々は落着きを得るだろう。何故なら

> for she can so inform
> The mind that is within us, so impress
> With quietness and beauty, and so feed
> With lofty thoughts, ...

例え「孤独，恐怖，苦痛或は悲しみが身をおそっても」自然を観ることによって，自然を通しての或る存在の感得によって，身内に醸されている「気高き楽しみ」によって耐え忍ぶこともできるだろうとワーヅワスは，自然を観ることを学ぶように妹に諭している。然しこれらの exhortation は彼の dear sister に対してだけのものではない。妹と同様にワーヅワスの過去に経験した喜びを現在もっている者への呼びかけともなっている。それはまだ自然を観ることを学んではいない読者への呼びかけに通じているのである。

Therefore let the moon
Shine on thee in thy solitary walk;
And let the misty mountain-winds be free
To blow against thee:

ここに詩人の教えが象徴されている。これは妹への言葉であると同時に我々読者への言葉である。